

中京大学所蔵『源氏物語』(五冊本)について

―若菜上巻の本文の特性―

藤井 日出子

はじめに

『源氏物語』において、いわゆる別本⁽¹⁾とされている諸本の中でも、麦生本と阿里莫本⁽²⁾は同系統であることが知られている。しかし、これら両本の存在は、源氏物語別本諸本群の中にあつて、きわめて特異である。

そもそも別本という名称は、池田亀鑑氏によつて命名され、『源氏物語大成』(研究編)では、青表紙本でもなく河内本でもない⁽³⁾と認められる諸本を、系統分別など考慮にいれず悉く一様に「別本」として扱つた、系統の明らかなくない種々様々の孤立した伝本群の謂いであり、一連の古鈔本があるのではないと述べられて

いる。さらに氏は「別本の種類」を

- 一 河内本成立以前の古伝本である場合。
- 二 河内成立以後の混成本文を有する伝本である場合。

- 三 注釈的意図によつて取扱はれた本文である場合。
- 四 絵詞・古注釈・古系図に摘要引抄されて残存する本文である場合。

と四種類に分けられ、続いて

第三の場合について見よう。これは源氏物語においては比較的所見が少ない。麦生本及びその系統と思はれる阿里莫神社旧蔵本の如き、あるひはこ

の傾向をもつかもしれないがなほ研究を要する。
かかる本文の性格についての断定的な発言は慎重でなければならぬ。⁽³⁾これも今後に残された重要な課題の一つであろう。

とされ、両本が注釈的意図の明らかな本文を性格として持ち、またそのために『源氏物語大成』に採用されたことが分かる。どのようなことが、注釈的意図にあたるのかは明らかにされていないが、このことが両本と他本との本質的違いであり、他本とを峻別する点であると捉えられていたといえよう。

このような状況下に、⁽⁴⁾長谷川端先生が中京大本四巻五冊本の解題を書かれ、⁽⁵⁾両本と同系統であることを指摘された。さらに岡寫偉久子氏は、中京大本と麦生本との調査結果から橋姫巻においては同一の書写者が存在するとされており、これら三本の本文を検討し、その特性を明らかにすることは急務であると考ええる。

まず若菜上の本文をみてみたい。中京大本・阿里莫

本（麦生本は欠巻）と青表紙本とを対校すると、次のような大きな違いが見られる。⁽⁶⁾

〔阿〕朱雀院の御門ありし・
し・みゆきの、ち・
ろをひよりれいならす
なやみわたり給もとよ
りあつしくおはします
内にも此たひは物心ほ
そう・
ろ・
きを後の宮のおはしつ
る・
と、こほりてすくしつ
るをいまはなをそのか
たにもよをすにやあら
ん世にひさし・
しき心ちなんとするな

〔晋〕朱雀院の御門ありし・
ゆきの後其比ほより
れいならすなやみわた
らせ給もとよりあつし
くおはしますうちにこ
のたひは物心ほそくお
ほしめされてとしころ
をこなひのほいふかき
をこきさいの宮おはし
ましつる程はよろつ
は、かりきこえさせ給
ていま、ておほしと、
こほりつるを猶そのか
たにもよをすにやあら
む世にひさしかるまし

とおもほしの給てさる
へき御心まうけし給御
子たちは春宮を、き奉
りて女宮なん四人おは
しけるその中にふちつ
ほの女御と聞えしはせ
んていの源氏にそおは
しける

(1・ウ)

き心なんするなどの
たまはせてさるへき御
心まうけともせさせ給
ふ御こたちは春宮を、
きたてまつりて女宮た
ちなん四ところおはし
ましけるその中にふち
つほときこえしは先帝
の源氏にそおはしまし
ける (1025)

若菜上の冒頭文を、中京大(阿里莫)本にあわせてみたものである。朱雀院は病み出家を考えるが、女三宮の将来を思い悩む心中が語られている箇所である。中京大(阿里莫)本には他本にはないいくつかの特性がみられ、しかもそれは若菜上全体に亘っているものである。すべて関連しているが、整理上次の三点にまとめた。

①『源氏物語大成』本文に比し、省略されたかとも

られる語句が多いため、文全体がや、短くなっている。

②他の諸本にはみられない語句・語彙が用いられている。

③敬語の使用に特異性と簡略化がみられる。

①については、『源氏物語大成』の青表紙本(大島本)の字数のおよそ四六五〇〇字に対して、中京大(阿里莫)⁽⁷⁾本は四三六〇〇字である。これは中京大本の丁数にすると六丁程にあたり、『大成』全体の約十分の一程短縮されていることになる。これがどのようになされているかをみてみよう。この箇所では『源氏物語大成』の他の全諸本に「は、かりきこえさせ給ていま、ておほしと、こほりつるを」とあるのを、中京大(阿里莫)本では「思と、こほりてすくしつるを」となっていることにみられるように朱雀院の心中は描かれていない。しかし簡略化された表現の中に、全体の流れはかえって分かりやすく説明されているともいえる。これは青表紙本他の諸本が中京大(阿里莫)

本をもとに増幅されたというより、中京大（阿里莫）⁽⁸⁾本が物語説明のための意図をもって簡略化されたと考えられる。

②については、『源氏物語大成』の他の諸本に「ふちつほ」とあるところが、中京大本では「ふちつほの女御」、阿里莫本では「きりつほの女御」とある。中京大本はもとは「きりつ」に傍書に「藤イ」とあったものが傍書ともども削られ、「ふちつ」と重ね書きされている。もとは阿里莫本同様「きりつほの女御」とあったものである。このような異文は伊井春樹氏が書写者ないしは所持者は、かなり物語全体を熟知し、より正統な表現をこころがけようとしたともいえるわけで、流布本と異なると一蹴することはできなくなるであろうとされるように、物語解釈上の問題をもはらんでいる。また、接尾辞「ども」を伴う青表紙本の「御心まうけとも」が、中京大（阿里莫）本では「御心まうけ」と、「とも」が消去され、あるいは「なと」に⁽⁹⁾転換される用例が他にも散見されるが、このような異

同は他の諸本にはみられない。

③については、主語が朱雀院であるにもかかわらず、中京大（阿里莫）本では敬語が簡略化され、敬意が低められているかに見られる。青表紙本の「おほしめされ」は「おもほし」、「おほし」は「思」に、「のたまはせ」は「の給」、二重敬語「なやみわたらせ給」は「なやみわたり給」となっている。ところが、この箇所直後には同じ朱雀院に対して、青表紙本の二重敬語「御もきの事をおほしそかせ給」（1026・4）は、中京大（阿里莫）本でも「御もきの事をいそかせ給」（2・ウ）と、「せ給」の表現がされている。しかし、中京大（阿里莫）本では、この前後の朱雀院は「給」のみで遇されているところから、この「御もきの事をおほしそかせ給」の「せ」は尊敬ではなく使役の意ではないかと考えられる。若菜上全体の「せ・させ給」の用例をみると、青表紙本の10四例に対して、中京大（阿里莫）本は五四例であり、青表紙本その他の諸本の用例のおよそ半分である。これはおもに

朱雀院・帝・春宮など最高敬語のつくべき人々も、「給」のみの待遇になっているからである。もちろん玉上啄弥氏が述べられるように「せ・させ給」の「せ」「させ」が使役か尊敬か、判然と区別のつけがたいことはしばしばあり、いづれか一方と割り切れないのは当然であるが、⁽¹¹⁾このような大量の用例数の差異は、青表紙本など諸本と中京大（阿里莫）本との間に「せ・させ給」の使用法そのものに異なりがあることを示しているのではないか。

また朱雀院の母太后・女宮には、青表紙本での「おはします」が中京大（阿里莫）本では「おはす」に低められている。しかし朱雀院にはそのまま「おはします」の待遇をしている。他の諸本には異同はなく、「おはします」の語に対して設けた中京大（阿里莫）本の⁽¹²⁾特別の意識が窺える。

そこで、小論では中京大（阿里莫）本の「せ・させ給」・「おはします」の個々の用例を青表紙本と比較検討することによって、その意義と敬語表現の特異性

を明らかにし、最後に中京大（阿里莫）本の性格にふれたい。

一

I、まず、青表紙本に「せ・させ給」とあるが、中京大（阿里莫）本では「給ふ」としている用例について⁽¹³⁾考察したい。表の青表紙本番号の1・3・5・6・10・12・14・15・16・19・21・22・22・23・26・27・39・42・75・79・60・69・77の用例である。そのうち、60・69・77については別に論ずる。三例以外の用例の敬意の対象者を見ると、朱雀院（一例承香殿を含む）十五例、春宮二例、冷泉帝一例といった至高の人々であるにもかかわらず、中京大（阿里莫）本では「給ふ」で待遇しているのはなぜであろうか。朱雀院の用例について見てみたい。

^(阿) 山こもりし^後なんのちの — ^(書) やまこもりし^後なんの

世にたちとまりてたれ^{立・誰}
をうしろみとたのむか^頼
けにて物し給はんと
た、この宮の御事をお^此
もほしなけくにし山な^西
②る寺つくらせ給てうつ
ろひ給へき御いそきに

(2・ウ)

世にたちとまりてたれ
をたのむかけにて物し
給はんとすらむとた、
この御事をうしろめた
くおほしなけくにし
山なる御寺つくりはて
6、うつろはせ給はん程
7の御いそきをせさせ給
に (1026・4)

朱雀院が出家をするべく、その準備をしている箇所である。青表紙本における「御寺の造営・移転の準備」の表現は、「うつろはせ給はん・いそきをせさせ給に」であるが、これは院に対する二重敬語と考えてよいだろう。ところが、中京大(阿里莫)本では、対応する同箇所のうち移転については「うつろひ給へき」という表現であり、至高の朱雀院に対して「給」で待遇している。このようなことから、「給ふ」は一般的には二重敬語より敬意が低いとされているが、小久保崇明

氏が『大鏡』では帝に対しても「給ふ」の用例が存すること、ここに「給ふ」の特殊な語性が見られるとされているように、ここでも「給ふ」は最高の敬意をも表現できる特殊な語であったことを推測させる。したがって同箇所にも、青表紙本では「御寺つくりはて、」とするとところを、中京大(阿里莫)本ではこの箇所のみ「せ」を加えて「寺つくらせ給」としているが、これは二重敬語ではなく、寺の造営については朱雀院が人にさせたことを明らかにするためではないだろうか。なぜなら、中京大(阿里莫)本では至高の人をも「給ふ」で待遇しており、「せ・させ」の役割は自然と使役になったことが考えられるからである。このことについて次にみてみる。

中京大(阿里莫)本では、使役と認めない用例については、次のように「させ」を省略している。

〔中〕三日のほとは夜かれな
くわたり給をとし比は

〔考〕三日か程はよかれなく
わたり給をとしころさ

さもならひ給はぬ心ち
にし^也のふれと物あはれ
なり御そともなといと
とたきしめ給^ふ○物から
うちなかめて物し給け
しきいみしうらうたけ
におかし

(37・ウ)

もならひ給はぬ心ちに
しのふれと猶もあはれ
なり御そともなといよ
58くたきしめさせ給も
のからうちなかめても
のし給けしきいみしく
らうたけにおかし

(1059・4)

青表紙本など諸本においては、女三の宮降嫁の三日の
夜、紫の上が源氏のために御衣に女房などを使って香
をたきしめさせたものであり、「たきしめさせ給」の
「させ」は明らかに使役の意といえる。ところが、中
京大(阿里莫)本では「させ」がない。これは香をた
きしめる行為が紫の上自身の行為とみなしたためであ
り、青表紙本とは明らかに解釈上の相違を示している。
よって中京大(阿里莫)本では、本人自身あるいは
自身の行為とみなしたものについては、「給」のみで
遇するのが普通であり、「せ・させ」は当該箇所を使

役と解した時に使用している⁽¹⁶⁾のである。

Ⅱ、次は逆に、青表紙本に「給ふ」とあるが、中京大
(阿里莫)本では「せ・させ給」となっている用例で
ある。中京大(阿里莫)本番号②・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱で
ある。敬意の対象者は朱雀院・玉蔓・一品の宮・太政
大臣・紫の上のそれぞれ一例である。これらの用例に
おいても、「せ・させ」の役割は使役であることが分
かる。次の敬意の対象者が玉蔓の用例でみる。

〔阿〕御かさしのたいにはち
んしたんをつくりめつ

らしきあやうす物いた
きもとにおなしき木を
もかねをも色をつかひ
なしたる心はへ^有ありさ
まい^今まめかし^今かんの君
いと物のみやひふかう

〔香〕御かさしのたいにはち
んしたむをつくりめつ

らしきあやめをつくし
おなしきかねをも色つ
かひなしたる心はえあ
りいまめかし^今くかんの
君もの、みやひふかく
かとめき給へる人にて

かためい給へる人にて
めなれるさまにしいた

めなれぬさまにしなし
給へる

⑮させ給へり

(1053・7)

(31・オ)

玉鬘が光源氏に若菜を差し上げ、四十の賀を催す箇所である。青表紙本では、玉蔓の行為を「しなし給」とするのに対して、中京大(阿里莫)本では「しいたさせ給」とし「せ」を加えている。この箇所でも玉蔓への二重敬語の待遇では勿論なく、中京大(阿里莫)本は使役の意として玉蔓が人にさせたことを明らかにしたのであろう。一品の宮以外の太政大臣、紫の上が敬意の対象である用例についても同様であり、わざわざ中京大(阿里莫)本が「せ・させ」を加えたのは、使役の意を強調するためと考えられる。②の用例の朱雀院についても、出家願望によって、朱雀院がわざわざ寺を造らせたと解したからこそ、青表紙本その他の諸本に「御寺つくりはて」とするところを、中京大(阿里莫)本では「寺つくらせ」とし、わざわざ「せ」を

加えて使役の意を強調したものと思われる。

このように、「せ・させ」の用法は中京大(阿里莫)本の特異な解と結びついている。次に、さらにこのことを考えてみたい。

Ⅲ、中京大(阿里莫)本が青表紙本同様「せ・させ給」とする用例については三種類に分けられる。

まずはじめは、中京大(阿里莫)本が青表紙本同様に、当該箇所の人物が別の人にさせたのだと解釈したために「せ・させ給」という表記が一致したと見られるものは、敬意の対象者が光源氏 56(17)・59(22)・63(24)・65(26)・91(46)、朧月夜 64(25)、六条院の方々 68(29)、紫の上 70(35)、明石の君 71(31)、式部卿の宮 72(32)の用例であろう。56(17)の用例を見ると、玉蔓が若菜を献上し四十の賀のために参るのに備え、光源氏は六条院の調度を整えさせている。これを中京大(阿里莫)本(17の用例)が青表紙本(56の用例)同様「きよらにせさせ給へり」とするの

は、源氏が人を使つてさせたとする解をとつたからである。⁽¹⁸⁾したがつて以上の用例は、中京大(阿里莫)本が当該箇所を使役と解して、青表紙本同様に「せ・させ給」残したものであると考えられる。

ところが、次の敬意の対象者が朱雀院8(3)・35

(9)・36(11)・43(12)、帝82(39)・83(40)、

春宮73(33)、中宮76(36)・89(44)、光源氏90(45)

の用例は、「せ・させ給」という表記は同じでも、中京大(阿里莫)本は青表紙本と当該箇所の解釈が異なっているのではないか。朱雀院の例について見てみたい。

〔中〕しつらひはかへとの、^殿

にしのたいに御丁よりはしめてこゝのあやしきをませ給はすもろこしの后のかさりをおもほしやりてうるはしくことくしくか、

〔意〕御しつらひはかへ殿の

にしおもてに御きちやうよりはしめてこゝの42あやにしきをませさせ給はすもろこしのきさきのさかりをおほしやりてうるはしくことし

やくはかりよろすのか^萬

⑫さりをとゝのへさせ給

て御こしゆひにはおほ

きおとゝをねん比にか

さねても御せうこそあ

りければ(20・オ)

くかゝやくはかりとゝ

43のへさせ給へり御こし

ゆひにはおほきおとゝ

44をかねてよりきこえさ

せ給へりければ

(1043・6)

朱雀院は、出家を前に女三の宮の裳着の準備に忙殺されている。青表紙本では、朱雀院の行為は「ませさせ給はす」、「とゝのへさせ給へり」と、ともに「させ給」の待遇である。しかし、中京大(阿里莫)本では、一方は「ませ給はす」と「させ」が省略されているが、他方は「とゝのへさせ給て」と、逆に「させ」が加わった表現になっている。これは中京大(阿里莫)本が、一方の女三の宮の調度の生地にまで自ら心を配ることについては朱雀院自らの行為とするが、他方のそれらをととのえることについては朱雀院が人に命じてさせたものであるという、ことさらの区別を示したものである。つまり、同様の表現には見えるが、青表紙本

のほうはともに「させ給」という二重敬語であるが、中京大（阿里莫）本の「と、のへさせ給て」については、「給ふ」に使役の意を明らかにするための「させ」を加えたものと考えられるのである。

次の用例においても、中京大（阿里莫）本は青表紙本と同様の表記であるが、解釈を異にしている。

〔阿〕藤大納言はとし比院の

へたうにてしたしうさ

ふらひなれたるを御山

こもりし給なんのちよ

り所なく心ほそかるへ

きことをこの宮の御事

⑨によせてかへりみさせ

給へく御けしきせちに

⑩給はらせ給なりけり

（17・オ）

〔青〕藤大納言はとしころ院

の別當にてしたしくつ

かうまつりてさふらひ

なれにたるを御山こも

りし給なんのちより所

なく心ほそかるへきに

この宮の御うしろみに

35事よせてかへりみさせ

給へく御けしきせちに

給はりたまふなるへし

（1040・4）

藤大納言が女三の宮降嫁を切望する様子が描かれている。青表紙本では朱雀院には「かへりみさせ給」と二重敬語が用いられ、藤大納言には「給はりたまふ」と敬意を低くし、身分上の差異とともに朱雀院が主体であることを示している。しかし中京大（阿里莫）本においては、「給はらせ給」と使役の「せ」が加えられ、藤大納言が誰かに内意をいただかせようと画策していることが窺える。また今までの考察からも、中京大（阿里莫）本においては、「かへりみさせ給」の「させ」は使役の意であり、そうすることで、藤大納言の朱雀院に画策する強い姿勢を浮かびあがらせている。これは中京大（阿里莫）本が、この箇所を藤大納言主体の本文と解したからこそ「せ」を加えたものであろう。他の用例についても、中京大（阿里莫）本と青表紙本は、ともに「せ・させ」の表現であるが、中京大（阿里莫）本の「せ・させ」は使役の意で使用されており、当該箇所の本文解釈もそれに伴って異なっている。

最後の用例も、中京大(阿里莫) 本の敬語意識の特異性を示している。用例としては、朱雀院20 (4)、光源氏61 (23)、103 (54) である。

④^(阿年)としくれ行まゝに御なやみまことに^をおもくな
④らせ給てみすのほかに
もいて給はす御物のけ
にときなやみ給ことは
あれと (4・オ)

④^(重)としくれ行まゝに御なやみまことに^をおもくな
20りまさらせ給てみすの
21ともいてさせ給はす
御もののけにて時なや
22ませ給こともありつれ
と (1027・13)

朱雀院は女三の宮の将来を心配するあまりに、病が重くなつていく様子が描かれている。青表紙本では朱雀院については「なりまさらせ給」、「いてさせ給はす」、「なやませ給」など、すべて「せ・させ給」であり、二重敬語で待遇している。ところが、中京大(阿里莫)では「ならせ給」、「いて給はす」、「なやみ給」と、一例は「せ給」、二例は「給」で遇している。この二例

については、中京大(阿里莫)では、先述のとおり最高位の人物も「給ふ」で待遇することが見え、この箇所も矛盾はない。しかし、この箇所の「ならせ給」の「せ」は、他の先述した朱雀院の五例とは異なり、明らかに使役ではない。しかもこの「ならせ給」が、他の二例の「給」より敬意が高められているとも考えられない。

このような中京大(阿里莫) 本の用例は、ここにあげた朱雀院(一例)、光源氏(二例) 以外に、(Ⅱ)であげた一品の宮(19)の用例がある。一品の宮は、青表紙本においても「給ふ」で待遇される人物であり、中京大(阿里莫) 本においてわざわざ敬意を高くするために、「このませ給」としたとは考えられない。したがって中京大(阿里莫) 本においては、これら四例の「せ・させ給」と「給」との間には敬意の差がないと見るべきであろう。他の諸本には異同はなく、このことも中京大(阿里莫) 本の敬語意識の特異性を示している。

二

中京大（阿里莫）本の特異な敬語意識は、「おはします」の使用にも表れている。「おはします」についても地の文を見ると、青表紙本の二十例に対する中京大（阿里莫）本の十七例は、数の減少だけでなく、その使用上の意識に異なりがあることが分かる。青表紙本の敬意の対象者とその用例数は、朱雀院（六）、春宮（一）、女三の宮（二）、藤壺（一）、秋好中宮（一）、光源氏（五）、弘徽殿の太后（二）、朱雀院の女宮（一）、女三の宮の母藤壺（一）例と、その使用範囲は皇統と院の母にまで広がっている。ところが中京大（阿里莫）本では、弘徽殿の太后（二）、朱雀院の女宮（一）、女三の宮の母藤壺（一）の用例は、すべて退けられている。しかしその一方では、女三の宮と明石の女御がそれぞれ一例加えられている。このような「おはします」の語のいっそうの限定的使用は、

この語にさらなる高貴性を付加しているといえよう。この語を加えることによって、得ようとしたものは何であろうか。

次の女三の宮の用例でみてみたい。

〔阿〕
中 女宮君いとらうたけにて
⑰ おさなきさまにておは
します御しつらひなと
のこと／＼しくよたけ
ううるはしけにみつか
らは何心もなく物はか
なきほとにていと御そ
かちにてみもなうあへ
かなりことにはちなと
もし給はすちこのおも
きらひせさらん心ちし
て心やすうつくしき
さまし給へり

〔重〕
女宮はいとらうたけに
おさなきさまにて御し
つらひなとのこと／＼
しくよたけくうるはし
きに身つからはなに心
もなくものはかなき御
程にていと御そかちに
身もなくあえかなりこ
とにはちなともし給は
すた、ちこのおもきら
ひせぬ心ちして心やす
くうつくしきさまし給
へり

(45・オ) — (1065・10)

この箇所は、女三の宮の光源氏降嫁後まもなくのものである。この箇所では、中京大(阿里莫)本は青表紙本の本文に対して、「おはします」・「御そかちに」に「て」・「おもきらひせぬ」に「ん」などの語句を加えている。また青表紙本の「うるはしきに」は、形容詞連体形と逆接の接続詞「に」がついたものである。しかし中京大(阿里莫)本の「うるはしきに」は、形容動詞連用形である。中京大(阿里莫)本のこの異同は、青表紙本の文意を微妙にずらしつつ、女三の宮像を変えようとしていることを示している。

つまり青表紙本では女三の宮の幼さや可愛らしさは、人格の幼稚さと重ねられるとともに、調度品の立派さと対比されることで批判が加えられているが、中京大(阿里莫)本では、「おはします」を挿入することで文が完結し、女三の宮の幼い可愛らしさが強調されているのである。さらに青表紙本の逆接の「に」を「うるはしきに」と形容動詞にすることによって、このこ

とを助長している。なおこの「おはします」の語については、先に述べたように限定的使用を行なった上で挿入であり、女三の宮の高貴性を際立たせる効果をあげている。同様に青表紙本に「た、ちこのおもきらひせぬ心ち」とするのを、中京大(阿里莫)本では「ちこのおもきらひせざらん心ち」と「た、」を削り、「せぬ」に「ん」を加えて「せざらん」と婉曲表現にしている。このために青表紙本の女三の宮への批判的材料は、中京大(阿里莫)本では、逆に高貴な女性を表現する道具立てにすりかわってしまったている。

このように中京大(阿里莫)本の「おはします」の語の挿入は、文脈までも変容させている。そして特にこの語を加えられた女三の宮には、高貴の光があてられているようになっているのである。また明石の女御にたいしても「おはします」の語が加えられているところから、明石の女御の若宮出産が光源氏の栄光を保証するのに対し、逆に女三の宮の降嫁はそれを崩すものとして、ともにこの二人が若菜上巻の主人公である

ことを明確にしていることもある。ここには、中京大(阿里莫)本の諸本には見られない解釈上の考えが、語句の特異性として表れている感がある。

まとめ

中京大本と阿里莫本は、表記上だけではなく語句にも異なるものが散見されるが、以下にまとめた事柄は両本と他本とを峻別するものであり、明らかに岡寫偉久子氏の調査されたように同系統といえる。そこで中京大(阿里莫)本として扱い、次のようにまとめた。

○青表紙本その他の諸本が最高敬語とする「せ・させ給」の語は、中京大(阿里莫)本では主として使役の意の場合のみ使用され、最高位の人も「給ふ」の待遇である。ここに「給ふ」の語の特別の語性が窺われる。

○中京大(阿里莫)本の四例の使役の意ではない「せ・させ給」と「給ふ」との間には、敬意の高低はないと見られる。なおこの場合の「せ・させ給」は、特

定の語に付くようである。

○青表紙本その他の諸本と同様に、中京大(阿里莫)本においても院、帝、春宮の「おはす」の語の使用例はなく、「おはします」の語のみの待遇であり、この語の敬意度の高さを示している。さらに中京大(阿里莫)本では、弘徽殿の太后、女三の宮の母藤壺、朱雀院の女宮の用例を削る一方で女三の宮、明石の女御には新たな用例が加えられ、この語に更なる高貴性を付加し、それを主人公へ付与したものと見られる。ここには中京大(阿里莫)本の解釈上の考えがほの見えており、本文の特異性もそれによって引き起こされたものであることが分かる。

以上の中京大(阿里莫)本の特異性は、本文が諸本と比べて短縮されていることとも関連して、池田亀鑑氏が注釈的意図によって取扱われた本文とされたことを追認するものであろう。

注

- 1 中村一夫氏「源氏物語別本の性格」(『源氏物語小研究』創刊号平二・五 源氏物語別本集成刊行会)、大谷晋氏「『桐壺』と『夕顔』諸本の検討」(『詞林』第四号昭六三・十 大阪大学古代中世文学研究会)。
- 2 両本については、岡寫偉久子氏の「源氏物語阿里莫本」(『ビブリア』第九十号昭六三・五)、「源氏物語麦生本」(『源氏物語研究』第一号平三・五 源氏物語別本集成刊行会)。
- 3 さらに「現に鎌倉時代の写本と思はれる伝本の本文と麦生本とが一致する如き事実があり、俄に中世の作為とみなしがたく、また麦生本の関係者が親行のやうな大規模な校訂事業をなしたとも考えられない」と述べられ、氏は両本が成立年代の点でも、遡りうる可能性があるとして両本を重要視されている。

- 4 「若菜上・下、橋姫、総角、早蕨」の五巻。長谷川端先生「室町末期写。縦一九・八糎、横一五・一糎。原装茶染表紙。題簽は「わかな 下」(「下」の

文字は少々削られている)と「さわらび」のみ存。

列帖装。本文鳥の子模様。(中略)。池田亀鑑著『校異源氏物語』と対校すると、別本系の麦生鑑綱筆本や阿里莫神社旧蔵本に近い本文かと思われる。朱点・識語なし印記なし。」「(中京大学図書館国書善本解題増補版)、「中京大学図書館学紀要」第八号・一九八七)・以下中京大学図書館蔵「源氏物語」(四巻五冊本)を「中京大本」と略称する。

- 5 岡寫偉久子氏「中京大学図書館学紀要」(第一三号・一九九二)。

- 6 先に中京大本の本文および傍書に阿里莫本の異同、括弧内は中京大本の丁数と表裏、なお「・」は字数調節のための印。「○○」は該当する文字のないことを示す。後段は『源氏物語大成』本文、括弧内はページ数・行。以下同じ。なお、説明が前後するが、阿里莫本については、特にことわらない限り中京大本(阿里莫)本として扱った。また便宜上『大成』本文を青表紙本と称した。

7 阿里莫本は途中約一丁程の脱落がある。

8 このような用例は諸々にみられ、この箇所直後にも、女三の宮の母藤壺の不遇の身を案ずる朱雀院の心中が諸本では「みかとも御心の中にいとおしき物には思きこえさせ給」とあるが中京大（阿里莫）本では「思ほし」のみである。

9 これについては、伊井春樹氏が「後人が青表紙本と校合し、底本では「桐壺の女御」としていた本文が、青表紙本と同じく「藤壺」に改訂されてしまった」のであり、「女三の宮の母女御の姿は、どこか桐壺更衣の運命と重なることへの合理的な解釈ではある」と述べられている。他にも、中京大（阿里莫）本の名称・数値などの異文の指摘をされている（『中京大学図書館学紀要』第一三号・一九九二）。

10 中京大（阿里莫）本で省略した用例30例、しかし逆に「ども」を加えた用例が7例、したがって総数としては、青表紙本78例、中京大（阿里莫）本54例となる。このような大挙しての異同は他の諸

本にもみられず、特異といえる。国田百合子氏は『女房詞の研究続編』（昭五二風間書房）で、「『御湯殿上日記』にみえる接尾辞「ども」の用法は女房ことばの一特性である」と述べられている。中京大（阿里莫）本が「ども」をやや忌避したかにみられることが注意される。

11 玉上啄弥氏「敬語の文学的考察 源氏物語の本性（其三）」（『国語国文』第二二巻二号・昭二七・三）。

12 小久保崇明氏は「大鏡において帝に対しては尊敬語「おはす」で待遇することなく、常に「おはします」を用いる歴然とした慣習がある」（『大鏡の研究』昭四四・桜風社）とされていることは『源氏物語』諸本、中京大（阿里莫）本同様であるが、中京大（阿里莫）本では、その使用範囲をさらに限定している。

13 用例番号などについては、すべて「せ・させ給」・「おはします」の後出の別表による。先の「番号」は『大成』にみられる「せ・させ給」の通し番号、

「大ペ・行」はそのページ・行、「全ペ」は『日本古典文学全集』のページ、後の「番号」は中京大（阿里莫）本にみられる「せ・させ給」の通し番号、「中・丁」は中京大本の丁数・表裏、「^せ」は「^せ」の補入、「^す」は「^す」のミセケテ「^せ」の補入、「おはします」も以下同じ。阿里莫本の異同は中京大本の語句の上に記載。諸本の異同は用例についてのみあげた。

なお会話文については、森野宗明氏が「主人を話材化する場合には絶対敬語的な様相を帯びる」（『源氏物語の敬語』『解釈と教材の研究』昭四七・一二）とされるように、その場面における身分階級差以外の意識が働くようである。また「きこゆ・たてまつる・まゐる・つかうまつる」などの謙譲語については、「きこえさす・たてまつらす・まゐらす・つかうまつらす」に「給ふ」が加わったのか、「きこゆ・たてまつる」などに「せ・させ給」が加わっているのかの判断が困難である。したがって、これらは別

に論ずべきと考え小論では対象外とした。

- 14 前掲注（11）の同書に、「せ・させ給」は最高敬語であり、帝・后・東宮・上皇の列がこれにあたり、光源氏でも絵合・松風の巻に至って初めて見られる」とされている。

- 15 前掲注（12）。

- 16 後表の青表紙本番号69に「御まうけさせ給」とあるのを、中京大（阿里莫）本が「御まうけし給」とするのは、光源氏四十の賀を主催するのは紫の上自身だとして「させ」を削ったと考えられる。77の用例も、青表紙本の「御覧せさせ給はん」は、秋好中宮が源氏四十の賀に感謝の意を示し御覧いただくようにさせなさる意が、中京大（阿里莫）本では「御覧せられ奉らん」となり、受身と謙譲語に替えられており、秋好中宮本人の行為であることを明確にしようとする解釈的態度が窺える。

- 17 一品の宮の用例は、使役ではなくⅢで扱う。なお、

- ⑩、③⑤の敬意の対象者が藤大納言、光源氏の用例は

謙讓語としてここでは除いたが、「せ」を加えた意は同様と考えられる。

18 光源氏が敬意の対象者の青表紙本88の用例「ふたんにせさせ給」は、中京大（阿里莫）本では「ふたんにせさせらる」と異なるが、共に「させ」は使役の意であるうえに、「給」と「らる」は共に尊敬の用法である点では、同類である。

19 「かへりみせさせ給」（青）横山本。

20 ⑨の用例の主語については先述のように、青表紙本での朱雀院が中京大（阿里莫）本では、藤大納言

にかわるので除いた数。

21 『とはずがたり』（朝日古典全書）の後深草院が、「起く・出づ・臥す・いざなふ」などの語は「給ふ」、「見ゆ・入る・おる・笑ふ・立つ」などの語は「せ・させ給」と、両語で待遇されている。しかし、これらの語の間には、特に敬意の軽重はないようである。

22 「おはします」についても、前掲注（13）同様。

23 前掲注（5）。

付記—小稿は、平成四年解釈学会東海支部大会での口頭発表をもとに、加筆訂正したものです。席上、貴重なご意見をいただいたことをお礼申し上げます。なお、この稿を成すにあたり、御指導頂いた長谷川端先生に心より御礼申し上げます。また、貴重図書を拝見させていただきました本学図書館並びに、天理図書館に対しまして厚く御礼申し上げます。

若菜上巻の「せ・させ給」の用例

番号	敬意の対象	青表紙本用例	大成べ・行	全集 べ	番号	中（阿）本用例	中べ
1	朱雀院	なやみわたらせ給	一〇二五 1	11		なやみわたり給	1ウ
会 2	語手→朱雀院	は、かりきこえさせ給て	一〇二五 4	11			
3	朱雀院	御心まうけともせさせ給ふ	一〇二五 6	11		御心まうけし給	1ウ
	朱雀院母太后	まいらせたてまつり給て	一〇二五10	12	①	まいらせ給て	2オ
4	朱雀院	思きこえさせ給ながら	一〇二五12	11		おもほしなから	2オ
5	朱雀院	おりさせ給にしかは	一〇二五12	12		おりみ給ま、に	2オ
	朱雀院	御寺つくりはて	一〇二六 3	12	②	寺つくらせ給て	2ウ
6	朱雀院	うつろはせ給はん	一〇二六 3	12		うつろひ給へき	2ウ
7	朱雀院	いそきをせさせ給に	一〇二六 4	12		御いそきに	2ウ
8	朱雀院	おほしいそかせ給	一〇二六 4	12	③	いそかせ給	2ウ
9	朱雀院	とりわたしたてまつらせ給	一〇二六 6	13		わたし給て	3オ
10	朱雀院	そむかせ給へき	一〇二六 8	13		そむき給ぬへき	3オ
11	春宮	きかせ給て	一〇二六 8	13		きこしめして	3オ
12	春宮	わたらせ給へり	一〇二六 8	13		わたり給へり	3オ
13	承香殿女御	そひきこえさせ給	一〇二六 9	13		そひてま入給へり	3オ
14	朱雀・承香殿	きこえかはさせ給けり	一〇二六11	13		聞えかはし給ける	3オ
15	朱雀院	きこえしらせさせ給	一〇二六11	13		聞えしらせ給	3オ
16	春宮	おとなひさせ給て	一〇二六12	13		おとなひ給て	3オ
17	朱雀院	思きこえさせ給	一〇二六13	13		思聞え給	3ウ
18	朱雀院	きこえしらせさせ給	一〇二七 7	14			4オ
19	朱雀院	きこえつけさせ給	一〇二七 7	14		きこえ給	4オ
20	朱雀院	なりまさられ給て	一〇二七12	15	④	ならせ給て	4オ
21	朱雀院	いてさせ給はす	一〇二七12	15		いて給はす	4オ
22	朱雀院	なやませ給ことも	一〇二七12	15		なやみ給ことは	4ウ
23	朱雀院	さらせ給つれと	一〇二七14	15		さり給へれと	4ウ

番号	敬意の対象	青表紙本用例	大成ペ・行	全集 ペ	番号	中(阿)本用例	中ペ
24	朱雀院	よろこひきこえさせ給	一〇二八 4	15		よろこひ聞え給	4ウ
25	朱雀院	うちまらせ給つゝ	一〇三〇 5	18		御らんしつゝ	7オ
26	朱雀院	わつらはせ給ひめ宮	一〇三〇 6	18		わつらひ給ひめ宮	7オ
27	朱雀院	めてさせ給	一〇三二 1	20		めて給 ^ふ ○	8ウ
28	朱雀院	物せさせ給ふなれ	一〇三二14	22			9ウ
会 29	乳母→兄左中弁	もらしきこえさせ給に	一〇三三13	23		もらし聞え給て	10ウ
会 30	乳母→朱雀院	わきて聞えさせ給に	一〇三四 7	24	⑤	わきて聞えさせ給に	11オ
会 31	乳母→源氏	うけひき申させ給て	一〇三五 9	25		うけひき給てん	12ウ
会	乳母→源氏	おほし ^さ ためて	一〇三五 4	26	⑥	おほし ^さ ためせ ^さ 給	12ウ
会 32	乳母→女三宮	みえさせ給に	一〇三六 3	26	⑦	みえさせ給に	12ウ
33	朱雀院	思きこえさせ給へれば	一〇三八 1	28		おもほいたる	15オ
	朧月夜	そうせさせ	一〇三九14	31	⑧	そうせ ^{させ} ○○給	17オ
34	太政大臣	たまはらせ給	一〇三九14	31		給はり給	17オ
35	朱雀院	かへりみさせ給へく	一〇四〇 4	31	⑨	かへりみさせ給へく	17オ
	藤大納言	給はりたまふまるへし	一〇四〇 4	31	⑩	給はらせ給なりけり	17オ
36	朱雀院	おもむけさせたまへりし	一〇四〇 6	31	⑪	おもふけさせ給へりし	17ウ
会 37	春宮→朱雀院	ゆつりきこえさせ給はめ	一〇四一 3	33		まかせ聞え給はめ	18オ
38	朱雀院	まちきかせ給ても	一〇四一 4	33			18オ
39	朱雀院	御心たゝせ給て	一〇四一 5	33		心とけ給て	18オ
40	朱雀院	つたへきこえさせ給ける	一〇四一 5	33		つたへ給ける	18オ
会 41	源氏→朱雀院	はゝからせたまふ	一〇四二 4	34			19オ
42	朱雀院	ませさせ給はす	一〇四三 5	35		ませ給はす	20オ
43	朱雀院	とゝのへさせ給へり	一〇四三 6	36	⑫	とゝのへさせ給て	20オ
44	朱雀院	きこえさせ給へりければ	一〇四三 7	36		御せうそこありければ	20オ
45	帝・春宮	たてまつらせ給へり	一〇四三13	36		奉り給	21オ
46	源氏	たてまつらせ給ける	一〇四三14	36		奉り給	21オ
47	秋好中宮	てうせさせ給て	一〇四四 1	36	⑬	せさせ給て	21オ

番号	敬意の対象	青表紙本用例	大成べ・行	全集 べ	番号	中(阿)本用例	中べ
48	秋好中宮	たてまつれさせ給	一〇四四 3	37		奉り給	21オ
49	源氏	きゝたてまつらせ給て	一〇四五 9	39		きこしめして	22ウ
50	朱雀院	よろこひきこえさせ給て	一〇四五14	39		よろこひ聞え給て	23オ
51	朱雀院	きこえさせ給て	一〇四六10	40		聞え給 ^に ○	23ウ
会 52	源氏→朱雀院	きこえをかせ給はん	一〇四七 9	41		つけ聞え給はん	25オ
会 53	源氏→朱雀院	さためをかせ給へきになむ	一〇四八 2	42	⑭	さためをかせ給へきになん	25ウ
54	朱雀院	なまめかしくせさせ給へり	一〇四九 3	44	⑮	なまめかしくてせさせ給へり	26ウ
会 55	源氏→朱雀院	けしきはませ給し	一〇五〇 8	45	⑯	ほのめかささせ給し	28オ
56	源氏	きよらにせさせ給へり	一〇五三 2	49	⑰	きよらにせさせ給へり	31オ
	玉鬘	しなし給へる	一〇五三 7	49	⑱	しいたさせ給へり	31オ
	一品宮	このみ給こと	一〇五六 7	53	⑲	このませ給こと	30オ
	太政大臣	つくし給はんとする	一〇五六 8	53	⑳	つくさせ給へる	35オ
57	螢兵部卿	ゆつりきこえさせ給ふ	一〇五六11	54		ゆつり給	35オ
会 58	源氏→玉鬘	かそへしらせ給へる	一〇五七 4	54	㉑	かそへ ^{そへ} ○○させ給へる	35ウ
59	源氏	みか、せ給へり	一〇五七13	55	㉒	みか、せ給へり	36ウ
60	紫の上	たきしめさせ給ものから	一〇五九 4	57		たきしめ給 ^ふ ○物から	37ウ
61	源氏	おきさせ給て	一〇六三14	64	㉓	おきさせ給て	43オ
62	源氏	さしいてさせ給て	一〇六七 6	69			46ウ
63	源氏	しゐさせ給	一〇六七 7	69	㉔	しひさせ給ふ	46ウ
64	朧月夜	いそかせ給	一〇六八 3	70	㉕	いそかせ給	47オ
65	源氏	おらせ給へり	一〇七三 4	77	㉖	おらせ給へり	52ウ
会 66	乳母→紫の上	はく、みたてまつらせ給へ	一〇七八11	84	㉗	奉らせ給へく	57ウ
67	乳母→朱雀院	たのみきこえさせ給し	一〇七八11	84	㉘	たのみ聞えさせ給	58オ
68	六条院の方々	いかめしくせさせ給ふ	一〇八〇 2	86	㉙	われもわれもとせさせ	59オ
69	紫の上	御まうけさせ給	一〇八〇 3	86		御まうけし給	59ウ
70	紫の上	いかめしくせさせ給へり	一〇八〇 6	86	㉚	いかめしうせさせ給へ	59ウ
71	明石の君	せさせ給へる	一〇八〇12	86	㉛	せさせ給へる	60オ

番号	敬意の対象	青表紙本用例	大成・行	全集 ペ	番号	中(阿)本用例	中ベ
72	式部卿の宮	せさせ給ける	一〇八〇13	87	㉔	せさせ給ける	60オ
73	東宮	と、のへさせ給ける	一〇八二 3	89	㉓	と、のへさせ給ける	61ウ
会 74	源氏→帝	せさせ給ましくなん	一〇八二12	89	㉔	せさせ給ましくなん	62オ
	源氏	いなひ申給こと	一〇八二12	89	㉕	いなひ申させ給事	62オ
75	秋好中宮	まかてさせ給て	一〇八二13	90		まかて給て	62オ
76	秋好中宮	わかちてせさせ給	一〇八三 1	90	㉖	わかちてせさせ給	62ウ
77	秋好中宮	御覽せさせ給はん	一〇八三 2	90		御覽せられ奉らん	62ウ
78	源氏	きこえかへさせ給へは	一〇八三 4	90		聞えかへし給へは	62ウ
79	帝	と、めさせ給つ	一〇八三 4	90		と、め給つ	62ウ
会 80	源氏→帝	と、めさせ給て	一〇八三 4	90	㉗	と、めさせ給て	62ウ
会 81	源氏→帝	かそへさせ給へ	一〇八三 7	90	㉘	かそへさせ給へ	62ウ
82	帝	つけさせ給てける	一〇八四 2	91	㉙	つけさせ給ける	63ウ
83	帝	なさせ給つ	一〇八四 4	91	㉚	なさせ給へり	63ウ
84	源氏	よろこひきこえさせ給ふ	一〇八四 4	91	㉛	よろこひ聞えさせ給け	63ウ
85	帝	つかうまつらせ給へり	一〇八四 8	92		つかうまつる	64オ
86	太政大臣	つかうまつらせ給へり	一〇八四11	92	㉜	つかうまつらせ給 ^へ あり	64オ
87	帝	か、せ給へる	一〇八五 1	92	㉝	か、せ給へる	64ウ
88	源氏	ふたんにせさせ給	一〇八七 1	95		ふたんにせさせらる	67オ
89	秋好中宮	いかめしくせさせ給	一〇九二 5	102	㉞	いかめしうせさせ給	72ウ
90	源氏	ことそかせ給はて	一〇九二 7	102	㉟	ことそかせ給はて	72ウ
91	源氏	つかうまつらせ給	一〇九二13	102	㊱	さふらはせ給	73オ
会 92	使者→明石入道	御ともにさふらはせ給	一〇九六13	109	㊲	御ともにさふらはせ給	78オ
会 93	明石の君→明石女御	きこえさせ給める	一〇九九14	113		きこえ給める	81ウ
	紫の上	御心つかひし賜	一一〇〇 6	114	㊳	御心まうけせさせ給	82オ
会 94	明石の君→明石女御	かなひはてさせ給までは	一一〇〇13	114	㊴	かなひはてさせ給はん	83オ
会 95	明石の君→明石女御	をかせ給て	一一〇一 5	115			83オ
会 96	明石の君→明石女御	せさせ給へ	一一〇一 5	115		しらせ給へ	83ウ

番号	敬意の対象	青表紙本用例	大成ペ・行	全集 ペ	番号	中（阿）本用例	中ペ
会 97	明石の君→明石女御	なもらさせ給そ	一一〇一 5	115	㊦	なもら ^さ させ給そ	83ウ
会 98	明石の君→明石女御	思きこえさせ給な	一一〇一 7	115		思きこえ給な	83ウ
会 99	明石の君→源氏	きこえさせ給ひそ	一一〇二 13	117		きこえ給そ	85オ
会100	明石の君→源氏	なりかへらせ給める	一一〇三 6	118	㊩	ならせ給	85ウ
会101	明石の君→源氏	あけさせ給はん	一一〇三 11	118	㊪	あけさせたまはん	86オ
会	明石の君→紫の上	かすまへの給はすれは	一一〇七 7	123	㊫	かすまへさせ給めれは	90ウ
102	源氏	と、のへさせ給はす	一一〇九 10	126		と、のへ給はす	93オ
103	源氏	とはせ給	一一一一 10	129	㊬	とはせ給	96ウ
会104	柏木→源氏	ものせさせ給なめり	一一七一 12	137	㊭	物し給なめり	103オ

若菜上巻の「おはします」の用例

番号	敬意の対象	青表紙本用例	大成ペ・行	全集 ペ	番号	中（阿）本用例	中ペ
(1)	朱雀院	あつしくあはしますうち	一〇二五 2	11	㊮	あつしくおはします ^中 内	1ウ
(2)	弘徽殿太后	おはしましつる程	一〇二五 3	11		おはしつるほと	1ウ
(3)	朱雀院女宮	なん四ところおはしましける	一〇二五 6	11		女宮なん四人おはしける	1ウ
(4)	藤壺（女三宮母）	源氏にそおはしましける	一〇二五 7	11		源氏にそ ^は おわしける	2オ
(5)	春宮	おはします御すくせ	一〇二六 10	13	㊯	おわします御すくせ	3オ
(6)	朱雀院	おはしまさ、りつるを	一〇二七 13	15	㊺	おはしまさ、りつるを	4ウ
会(7)	夕霧→朱雀院	おはしまし、世	一〇二九 13	17	㊻	おはしまし、には	6ウ
会(8)	夕霧→朱雀院	おはしますころほひ	一〇三〇 1	18	㊼	^{位・・} 御くらゐにおはしまし、には	6ウ
会(9)	乳母→女三宮	ひとりおはします	一〇三三 14	23	㊽	一所おはします	10ウ
会(10)	乳母→女三宮	おもひのほかの事もおはしまし	一〇三四 3	23	㊾	^{事・} 思はぬさまのことおはしまし	11オ
会(11)	乳母→女三宮	さためかたくおはします	一〇三四 6	24	㊿	さためかたくおはします	11オ
会(12)	乳母兄弁→女三宮	さやうにおはしますやうも	一〇三四 13	24	㊿	さやうにもおはしますやうも	11ウ
会(13)	乳母兄弁→光源氏	さんおはします	一〇三五 4	25	㊿	さんおはしますへかめり	12オ
会(14)	乳母兄弁→朱雀院	さもおはしまさは	一〇三五 7	25	㊿	さもおはしまさんに	12オ

番号	敬意の対象	青表紙本用例	大成ペ・行	全集 ペ	番号	中(阿)本用例	中ペ
会(15)	乳母→不特定の方々	おはしますへかめる	一〇三六 2	26		おはすへかめるを	13オ
(16)	朱雀院	さまにもおはしまさねは	一〇四三 2	35	㊤	さまにもおはしまさねは	20オ
(17)	朱雀院	おはしますかたに	一〇四六 1	39	㊤	おほしますかたに	23オ
会(18)	光源氏→春宮	かくておはしませは	一〇四七 7	41		かく	24ウ
会(19)	光源氏→朱雀院	おはします御かけに	一〇四八14	43	㊤	は おほしまさん御かけに	26ウ
(20)	光源氏	人のおやけなくおはしますを	一〇五三11	50	㊤	人のおやけなくおはしますを	31ウ
(21)	光源氏	はしちかくおはします	一〇六四 4	64	㊤	はし 〇〇ちかくおはします	43オ
	女三宮		一〇六五10	67	㊤	おさなきさまにておはします	45オ
会(22)	光源氏→朱雀院	心もとなくおはします	一〇六五14	67		心もとなく	45オ
(23)	弘徽殿太后	おはしましし二条の宮	一〇六七14	69			47オ
(24)	光源氏	わたりおはしましたるよし	一〇七〇 6	73	㊤	わたりおはしましたるよし	49ウ
(25)	光源氏	こしらへきこへつ、おはします	一〇七四11	79	㊤	こしらへ聞えておはします	54オ
	明石女御	あへかなるおほむほとに	一〇七五 4	79	㊤	あへかにおはしますほとに	54オ
(26)	女三宮	おはしますおと、に	一〇七五 5	79	㊤	おはします東おもてに	54オ
会(27)	乳母中納言→女三宮	心ほそけにおはしますめるを	一〇七八 8	84	㊤	心ほそけにおはしますを	57ウ
(28)	藤壺	おはしまさぬことを	一〇八二 8	89	㊤	おはしまさぬを	62オ
(29)	秋好中宮	おはしますまちの	一〇八三 8	90	㊤	おはしますしんてんに	63オ
(30)	光源氏	おはしましたりしありさま	一〇八八 4	97	㊤	おはしましたりけるありさま	68オ
(31)	朱雀院	すておはします御かはりに	一〇九二 3	102	㊤	すてておはします御かはりに	72ウ
会(32)	明石尼君→若宮	いか、おはします	一〇九九12	113	㊤	いか、おはします	81ウ
会(33)	明石の君→若宮	女におはしまさむにたに	一一〇二10	117	㊤	女にておはしまさんたに	85オ
(34)	女三宮	めにちかくおはしますを	一一〇八11	125	㊤	めにちかくておわしますを	92オ